

地域情報（県別）

【静岡】人工関節センターを開設、レスパイト入院が好評-遠藤浩一・聖隷富士病院人工関節センターセンター長に聞く◆Vol.1

より専門的な人工関節治療を周知・提供するため、人工関節センター開設を病院に提案

m3.com地域版

静岡県東部に位置し、北に雄大な富士山を望む聖隷富士病院（静岡県富士市）。同院は2025年4月に人工関節センターを開設。整形外科医長でセンター長を務める遠藤浩一氏に、開設の背景やセンターの特徴について聞いた。

（2026年1月19日オンラインインタビュー、計2回連載の1回目）

▼第2回は[こちら](#)（近日公開）



遠藤浩一氏

日本最大の見本市主催会社から医師に転身

——まずは遠藤先生が、医師を目指したきっかけから聞かせてください。

静岡県東部の函南町出身で、高校までは野球に打ち込んでいました。部活で肩を痛めた際に、スポーツによるケガを専門的に診てくれる医療機関が近くになく、それを自分で解決しようと思ったのがスポーツドクターを目指すきっかけになりました。当時は日本人の野球選手がメジャーリーグで活躍し始めた頃で、国内の選手も肩や肘の手術を渡米して受けることが多い状況でした。高校卒業後はアメリカマサチューセッツ州立大学に進学し、アスレティックトレーニングを専攻しました。

大学卒業後は日本の医学部編入試験を受けるつもりでしたが、面接の練習を兼ねて受けた企業で内定をもらい、国内・海外営業に4年間従事。見本市のオーガナイザーとして、東京ビックサイトで何も無いゼロの状態から会期中の商談が100億円を超えるビジネスの場を作り、来場者・出展会社の利益に貢献することにやりがいを感じました。その後、海外の企業からのヘッドハンティングがあり、日本支社を立ち上げる仕事に携わりながら、2年間アメリカと日本を行き来していました。しかし30歳を手前に、本来目指していた医師としてのキャリアの道へ進むことに決めました。

—人工関節センター長に着任するまでの経緯を教えてください。

2011年に東海大学医学部に2年次学士編入し、2016年の卒業と同時に、聖隷浜松病院で初期臨床研修を受けました。そのまま同院の整形外科で専門医研修プログラムを履修し、途中で浜松医科大学医学部附属病院整形外科、浜名病院での勤務を経て、2020年10月に聖隷浜松病院に戻り、骨関節外科で森諭史先生の指導の下、股・膝関節の人工関節を専門に診療にあたってきました。年間120症例以上の人工関節置換術を執刀し、また、17施設で人工関節置換術の手術見学をさせていただき研さんを積んできました。

その後、聖隷富士病院から打診があり、2024年5月に生まれ育った静岡県東部に戻ってきました。翌2025年4月に人工関節センターを立ち上げ、センター長に着任しました。

—聖隷富士病院は、2026年で開院80周年を迎えます。

前身の静岡県農業会吉原病院の開院が1946年で、1999年から聖隷福祉事業団関連法人になっています。2007年に新病棟が完成し、2013年の病院本館の増床改築と管理棟の竣工を経て、現在の形になりました。

当院は地域の急性期から回復期を担う、内科・外科・透析病棟を備えた132床の総合病院です。患者さん一人一人に寄り添った医療の提供を大切にしながら、多職種連携を強みに手術前後のリハビリテーションや在宅復帰支援にも力を入れています。



聖隷富士病院

早期回復を目指す最小侵襲手術を実施

—どんな背景と目的で、人工関節センターを開設したのでしょうか。

当院のある富士市は静岡県内で人口が3番目に多い街で、市民の高齢化に伴い骨折などの外傷の症例が増加しています。一方で、富士の医療圏は医師不足が深刻で、骨折などの外傷対応が追いつかず、2023年は富士市内の整形外科疾患の89件が他医療圏に搬送されていました。まずは、富士医療圏の外傷症例を自分たちの医療圏で対応できるように貢献できればと診療を始めました。

私が当院整形外科に異動する前年の2023年度の整形外科手術は年間47件で、2024年度が441件、2025年度は約550件を見込み、10倍以上の整形外科手術の増加となっています。日々、富士医療圏の整形外科診療に貢献できるよう精進しています。

その中で、変形性股関節症・変形性膝関節症により日常生活に支障をきたしているにもかかわらず、適切な治療に至っていない患者さんに数多く出会いました。人工関節手術に対する理解不足や、手術への不安・恐怖心から受診や治療のタイミングを逸し、結果として歩行ができなくなった状態で受診される患者さんも少なくありませんでした。

こうした現状を踏まえ、患者さんが安心して相談・治療を受けられる体制を整えるとともに、地域の開業医の先生方に対しても当院の人工関節治療体制を明確にお伝えする必要があると考え、人工関節センターの開設を病院に提案しました。センター化したことで専門性を可視化でき、開業医の先生方と連携しながら適切なタイミングでの患者さんの紹介・治療につながっていると感じています。

——人工関節センターの体制と特徴を教えてください。

人工関節センターは整形外科内の専門部門という位置付けです。当院の整形外科は、私を含めて常勤医3人と非常勤医4人の7人体制です。その中で常勤医が中心となってセンターを担っています。整形外科医、内科医、麻酔科医、看護師、理学療法士などと連携し、手術を的確に施行することだけでなく、術前評価から術後リハビリ、退院後のフォローまで、当院で完結できる一貫した診療体制を構築しています。

人工関節置換術では早期社会復帰を目指すAMIS（前方最小侵襲手術）手技によるMIS（最小侵襲手術）や人工関節手術直後からアイシングシステムという装置を使い、患者さんの疼痛軽減や腫脹予防を積極的に行っていることも特徴です。

AMISは筋肉や腱を切らずに筋間・神経間を利用したアプローチで手術を行い、軟部組織への侵襲も少なく、術後疼痛の軽減や早期社会復帰、脱臼リスクの低減が期待できます。術前の状態にもよりますが、症例によっては術後2日で杖なしで歩けることもあります。AMISは専門的なトレーニングを受けた医師のみが行える手術であり、私は、AMISを日本に導入された、当時静岡赤十字病院に在籍していた西脇徹医師（現・山王病院股関節低侵襲治療センター長）から直接指導を受ける機会に恵まれました。

——レスパイト入院（介護家族支援入院）に対応している点も特徴と聞きました。

高齢化が進む昨今、旦那さんや奥さん、親の介護を行わないといけない方が増えてきています。そのため、家族の介護ができなくなることなどを理由に、人工関節手術を受けることをためらう患者さんも少なくありません。そんな方でも手術を受けられるよう、当院では患者さんが入院・手術している間、介護が必要なご家族を受け入れるレスパイト入院の体制を整えています。手術を受ける方の年代も上がってきており、老老介護などいろいろな問題が出てきています。このような取り組みを行っている病院は少なく、患者さんからとても好評です。

◆遠藤 浩一（えんどう・こういち）氏

2016年に東海大学医学部を卒業後、聖隷浜松病院で初期臨床研修を修了。その後、同院で整形外科医として勤務。2024年5月に聖隷富士病院に赴任し、2025年4月に人工関節センターセンター長に着任。日本整形外科学会整形外科専門医、運動器リハビリテーション医・リウマチ医、日本スポーツ協会公認スポーツドクター。

【取材・文＝鈴木 俊輔】（写真は病院提供）

記事検索

ニュース・医療維新を検索

